

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第70号

2014年3月

日本薬史学会2014年度の主要行事のご案内

2014年1月27日に開催された常任理事会で、本学会の2014年度の総会関連の日程が決まりましたのでお知らせします。すでに決定しています主要行事についても日程などをご案内します。なお柴田フォーラムおよび2014年会の詳細については続報でお知らせします。

●総会関連

開催日：2014年4月19日(土) 12:00より受付開始

会場：東京大学薬学系総合研究棟

- 1) 12:30～13:30 理事・評議員会(10階大会議室)
- 2) 14:00～15:20 総会(2階講堂)
- 3) 15:30～17:40 公開講演会(同上)
15:30～16:30 日本薬史学会前会長 山川浩司 「薬史学会60年を振り返って」
16:40～17:40 慶應義塾大学薬学部教授 黒川達夫 「ICHの歴史」
- 4) 18:00～ 懇親会(東京大学・山上会館)

●2014年度(第7回)柴田フォーラム

開催日：2014年8月2日(土)

会場：金沢大学角間キャンパス自然科学研究科1棟1階プレゼンテーション室

世話人：御影雅之・金沢大学教授

●2014年会(福岡市)

開催日：2014年11月22日(土)学会発表ほか

2014年11月23日(日)薬史ツアー in Fukuoka

会場：22日(土)九州大学医学部百年講堂

年会長：笹栗俊之・九州大学教授

23日(日)九州大学医学歴史館、中富記念くすり博物館などの見学会

編集委員会からのお知らせ

2014年6月発行予定の「薬史学雑誌」(第49巻第1号)は、日本薬史学会創立60周年記念特集号「続 日本製薬産業史」(仮称)となります。そのため一般論文の掲載は12月発行の第49巻第2号からとなります。ご了解のほどお願い致します。

なお、編集委員会で検討中の薬史学雑誌投稿規定の改定作業がほぼ終了しましたので、第49巻第2号に投稿予定の会員には告知(薬史レター第71号)の前に送付致します。希望者は学会事務局までご一報下さい。

「薬史学雑誌」全巻全号電子アーカイブ化に伴う 著作権移譲が決定（お知らせ）

編集委員会委員長 西川 隆

日本薬史学会編集委員会は、かねてより「薬史学雑誌」の全巻全号電子アーカイブ化に伴う著作権移譲に関するお願いを、薬史学雑誌および薬史レターを通じて数回にわたり行ってきました。

具体的には1966(昭和41)年12月発行の第1巻第1号から1990(平成2)年12月発行の第25巻第2号までの薬史学雑誌に掲載されました論文などの著作権を、日本薬史学会に移譲して載きたい旨の告示を行い、もし著者の方で譲渡をご了承できない場合は、その旨を2013(平成25)年12月31日までに、本学会

事務局にご連絡戴きたくお願いしましたが、ご承認戴けない申し出は皆無でした。

そこで編集委員会では、著作権が本学会に譲渡されたことを確認できましたので、その旨を2014(平成25)年1月27日開催の常任理事会に報告し、常任理事会において正式に著作権が移譲されたことを決定しました。ご協力ありがとうございました。

この決定により本学会広報委員会において、直ちに学会ウェブサイトへの収載作業を開始します。

日本薬史学会年会と支部活動

—昨2013年会札幌開催に当たって—

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

昨2013年10月5日(土)に札幌で開催された日本薬史学会2013年会は成功裏に開催された。前39号(2013.12)で報告されている。私にとっては2012年に本学会の会長になってからは、支部会が主催する年会への初めての参加となった。

2013年8月28日から、過去の「薬史レター」が1985年の第1号(2005年の第41号までは「薬史学会通信」として発行)から最近号まで全文、学会のwebsiteで見られるようになった。また「薬史学雑誌」は1966年の創刊号からの目次がすべてみられる。情報環境がよくなり過去を振り返るには便利となった。そこで、吉沢逸雄年会長からの要請もあり、3つの支部会の歴史と特徴についてまとめて、日本薬史学会2013年会の抄録集に学会長挨拶として収載させていた。本稿はそれに加筆修正したものである。

1954年創立の日本薬史学会の会員の集まりに関しては、1950年代末から1960年代末までは、薬史学雑誌第4巻2号(1969)の「創立15周年記念号」が

詳しい。日本薬史学会創立記事を冒頭に、各地で開催される日本薬史学会の年会のプログラムの一つとして開かれた「薬史学部会」について、1959年から1969年までの表、講演要旨、特別講演要旨、シンポジウムとパネル討論会の要旨、が記載されている。さらに1964年に始まり年に2ないし3回開催された「薬史学集団会」の表が1968年分まで収載されている。

現在の日本薬史学会年会は、2001年に最初の年会を東京理科大学(東京・市ヶ谷)を会場として開催されたものである。薬史学通信によれば、当時は「秋季年会」と称していたが「秋季に開催される年会」の意味であり、これを以って第1回の年会としている。2003年会から秋季がとれて「年会」となっている。現在に至るまで、この年会は「日本薬史学会2013年会」と、西暦を用いた表記法となっている。「日本薬史学会第13回年会」のようなナンバー・スタイルの名称ではない。

その理由は前会長の山川浩司氏によれば2つある

とのことである。第1に、1954年創立の学会初期の記録が明確ではなく、その当時「日本薬史学会第1回年会」などの名称が使われていた可能性がある。『日本薬史学会五十年史』（薬史学雑誌 2004:39 (1)として発行)作成時、薬史学雑誌、薬史学部会、集談会などの記録は調査、集録した。だがその他に、清水藤太郎氏らが「薬局」誌などに学会初期の活動を記録していたかも知れず、それらすべての調査は時間的制約から困難であった。第2に、2001年開催の年会を「第1回薬史学部会」などと称することも考えられたが、山川氏が日本薬学会理事の時「部会」制が実施され、氏担当の「医薬化学部会」が最初に承認された。この結果、informalに「薬史学部会」を表記する事が出来なくなった。

以上、日本薬学会の年会のプログラムの一つとしての「薬史学年会」は一定期間存在したこと、日本薬学会の組織そのものの中には薬史学部会は存在しなかったこと、などが明らかになった。会員諸氏で学会そのものの歴史に関心がある方は是非、1954年前後から1960年代中頃までの「薬局」誌を調査していただきたい。なお、2001年は21世紀の始まった年であり開催年の下2桁の数が、2001年から数えての回数と同じで覚えやすく便利である。

さて、支部で1番古いのは、**関西支部**で1990年10月13日設立である。当初は西部支部の名称であった。これまでに年2回、1月と6月に研修会を開催している。その会場は主に『くすりの道修町資料館』（大阪市中央区道修町）である。このことからわかるように、主に薬種の取扱いに端を発した薬業家を中心に発展し、現在も多くの製薬会社、医薬品卸などの医薬品関連企業、化学・工業薬品・試薬の扱ひ会社が存在する『くすりの道修町』が関西支部の活動の背景にある。研修会では2010年1月に第1回目が開催され、多様な講演がなされている。最近2回ほど近現代の医薬品シリーズとして、「クレオソート（正露丸）の歴史と再発見」（第6回、2012.6.30）および「抗結核薬イソニコチン酸ヒドラジッド開発の歴史－最近の抗結核薬開発の状況－」（第7回、2013.1.12）の講演がなされた。2008年に西部支部から関西支部へと名称変更され、また同年に大阪で年

会が開催された。支部長は初代が米田該典氏、2011年からは村岡修氏である。

2番目が2004年11月16日設立の**北海道支部**である。2009年北海道支部発行の『支部発足5年間の歩み』によれば、2002年会が富山で開催されたときに、当時の山川浩司会長が、年会終了後の立山黒部アルペンルートの周遊の折に長年の会員の齋藤元護氏に年会開催を依頼したのがきっかけとのことである。

『歩み』の「北海道支部前史」では、ほぼ10年おきに札幌で開催される日本薬学会年会の講演要旨を用いた薬史学関連演題の歴史的レビューがなされている。2001年の日本薬学会第121年会でのワークショップ「北海道の薬史」では、蝦夷地の薬物、蝦夷地採薬師、薬学教育、薬用資源開発と企業化、明治以降の薬業、の5つの歴史的テーマの報告がなされ、この準備が熱心になされたことが、北海道支部の設立の土壌となったようだ。

2004年設立の北海道支部が主体となって準備され翌年開催された、札幌での日本薬史学会2005年会は、わたしにとっては初めての東京以外での年会参加であった。組織運営が大変しっかりしていたことが、記憶に残っている。

北海道支部の活動として、春に北海道薬学大会において支部総会と特別講演会、秋に日本薬史学会北海道支部と北海道医史学研究会との合同学術集会をそれぞれ開催し、共同活動が盛んである。この横の組織との交流の潜在能力が高いことは、先の『歩み』に「つどい：将来を見据えて」として、社団法人北海道薬剤師会から財団法人北海道薬剤師公衆衛生検査センターまでの全13の組織の紹介がなされ各1ページにまとめて記載されていることからもうかがわれる。支部長は、初代齋藤元護氏、2012年に高田昌彦氏に引き継がれ、昨年（2013年）の年会の準備期間には体調不良の高田氏を、吉沢逸雄氏が代行され、また年会長も務められた。

3番目は**中部支部**である。2010年3月22日に東海支部として設立され、昨2013年4月に、北陸地区と信越地区を含めて中部支部となった。名古屋で2006年会が開催された後に、当時の山川浩司会長が、長年の会員である奥田潤氏に支部設立を依頼し

たのが発足の経緯である。北海道では2004年に支部が設立され翌2005年に年会開催であったが、東海ではまず年会が開催されその4年後に支部が設立されている。毎年、3月に講演会を、12月に例会を開催している。支部長は初代奥田潤氏、2013年に中部支部となってからは河村典久氏である。

以上3つの支部活動を見てきたが、それぞれ支部の性格は異なる。共通しているのは、支部長が2代目となり世代交代していることだ。多くの組織は初代はそのリーダーシップで組織を引っ張り活性化させる。だが、2代目の時代になると解決すべき課題も次第に見えてくるものでもあろう。また今後、新しい支部を設立する際には、これらの3つのモデルから学ぶことも多いと思われる。

日本薬史学会年会が初めて札幌で開催されたのは2005年だ。日本薬学会から委託されて日本薬史学会が作成し「ファルマシア」に5年ごと（一桁目が2と7の年の1月号）に掲載される「日本薬学会史年表」によると、8年前の2005年には、日本薬学会年会に薬学教育部会発足、臨床試験の事前登録開始、「たばこ規制枠組み条約」発効、郵政民営化法案が参議院で否決され衆議院解散、とある。

一定のサイクルで年会が訪れるのは、ホストする側にとっては、自らをとりまく歴史と現在と未来を見渡すよい機会かもしれない。また参加する側にとっても、見覚えのある建物や風景の中で、新しい発見があるものであろう。

2013年の六史学会合同例会に参加して

編集委員 小清水敏昌

冬晴れの寒い土曜日の2013年12月14日、お茶ノ水の順天堂大学11号館を会場として標記の合同例会が開かれた。今回から新たに「洋学史学会」が加入したので、従来の医史、薬史、歯科医史、獣医史、看護歴史に加え「六史学会」として開催した。そのためか参加者が例年よりも多く、約80名ほどであった。午後2時に今回の当番である本学会平林敏彦企画委員長による司会の挨拶でスタートした。

各内容とも中身の濃い発表で、とても充実感があり各々のテーマについてもっと時間をかけて拝聴したいと思った。次回が楽しみの例会であった。

1. 山田章雄氏（日本獣医史学会）：「One Healthの潮流」

表題の one health の意味は、地球規模でヒト、動物、環境の健康を適切なものとする事で米国獣医師会のタスクフォースが考案。この効用として医療、畜産、食品業界、旅行業界などにおいてリスクの低減に繋がる。世界規模で人類に好影響を及ぼすために最近では政治的にも関心が寄せられているという。しかし、この用語は商標登録され（Wildlife Conservation Society）、自由には使えないことには



会場風景

驚いた。面白い内容であり別の機会です詳しく知りたいと思った。

2. 竹原直道氏（日本歯科医史学会）：「歯科医院があった街角—東アジア編」

昔は人々の暮らしのなかに、日用品を売る店や薬局や歯医者などが街中にあった。最近では商店街の姿も変わり、昔の都市景観を捉え直すことを試みて、今回は太平洋戦争前の頃の東アジアの国々の写真をスライドにして考察を加えた。イギリスが支配した香港、アメリカが支配したマニラなどの他に朝

鮮、中国をはじめ当時の歯科医の家屋やその看板を示して解説した。

3. 滝内隆子氏（日本看護歴史学会）：「占領期における看護技術教育—使用されたテキストと当事者の証言から」

終戦直後の看護に係るテキストを探し教科内容を分析し検討を加えている。しかもこれらを用いて学生に教えた当時の教員を探し出し証言を引き出し、今回発表した。今から60年程前の看護教育資料を掘り出し考察している発表は真に秀でた労作と云えよう。

4. 澤健志氏（洋学史学会）：「佐賀藩が安政5年に購入したオランダ語の医学書について」

今回初参加の洋学史学会からは、江戸時代後半すなわち安政5（1858）年に佐賀藩が購入し、当時の医学校の好生館で教えていた医学系書籍68冊（うち薬学書4冊）について発表。佐賀藩で医学教育が充実したころに購入したようで、当時のヨーロッパの医学教育がフランスからドイツへ移行していた頃であったと考察した。したがって、書籍はドイツ語が半数近く、次いでオランダ語、フランス語などである。また、それらは10年以内に各国で出版されたという。ペリー来航の時代に地方の藩が世界から書籍を取り寄せ教育に力を注いでいた事実には驚いた。

5. 三浦恭定氏（日本医史学会）：「祖父三浦謹之助

の思い出」

演者は三浦家系図を示し、医学者を多く輩出した家系であることを紹介した。祖父謹之助氏は15歳で東大医学部予科入学し20歳に本科入学し特待生だったという。明治23（1890）年私費でドイツ留学。帰国し診療に専念し、32歳に東大内科教授に就任。講義では声が低いので学生は争って前の方の席で聞いたという。その後、東大病院長、定年後は同愛記念病院長に。大正天皇の主治医も務めた。昭和24年に文化勲章受章し翌年10月往診中に突然亡くなった。激動の時代に医者として教育者として貢献された一生だった。

6. 八木澤守正氏（日本薬史学会）：「我が国における抗生物質医薬品の発展」

感染症の撲滅によってわが国における乳児の死亡率が減少した功績は、抗生物質の発展によるエビデンスを知らしめた内容。演者の独特な歯切れの良い話し方やグラフを用いて説得力のある発表であった。なお八木澤氏の発表内容は別稿で示した。



恒例の懇親会は、会場を順天堂医院1号館2階レストラン・ヒルトップに移し、本学会五位野政彦常任理事の司会で終始賑やかに開かれた。各学会代表者の挨拶の後、美酒美味で懇親の輪が広まった楽しい一時であった。

「我が国における抗生物質医薬品の発展」

八木澤守正（慶應義塾大学薬学部）

抗生物質医薬品の歴史は、1928年の Alexander Fleming 博士によるペニシリンの発見から85年しか経っておらず、わが国においては1944年に戦時研究としてペニシリン製造法を模索し始めてから僅か70年の歳月しか経過していない。

しかしながら、1947年に50歳を越えた日本人男女の平均寿命が、1951年に60歳を越え、1960年に70歳を越えて現在の長寿国に至った要因の一つとして、肺炎、結核、腸チフスなどの致死的な感染症が抗生物質医薬品により制御されたことを挙げるこ



とができる。

我が国における抗生物質医薬品発展の足跡を辿ると、太平洋戦争敗戦後の占領期に連合国軍最高司令部総司令部 (GHQ) の公衆衛生福祉局 (Public Health & Welfare Section ; PHWS) の局長であった Crawford Sams 軍医大佐 (後に准将に昇格) が立案した政策に依るところが大きいことが理解できる。占領下の日本において、麻薬の製造・販売を根絶する代替えとしてペニシリンを国産化させるために、アメリカから製造技術を移入し、1946年の着手から僅か3年の間に、日本国内の需要を満たすに十分な量のペニシリンの工業生産を達成するに至らせた PHWS の政策と支援は極めて現実に則したものであった。

ペニシリンの工業生産が軌道に乗ると、PHWS は第二の課題としてストレプトマイシンの国内生産を推し進めたが、1950年の着手から僅か5年の間に十分な量が生産されるようになり、1950年に人口10万対146.4であった結核による死亡率が、1955年には10万対52.3と約3分の1にまで低下している。

PHWS は第三の課題として、腸チフスや赤痢に有効なクロラムフェニコールや、発疹チフスや発疹熱などのリケッチア感染症に対しても有効なクロルテトラサイクリンの輸入と臨床使用を進めており、占領が終了する1952年までの我が国における抗生物質医薬品の歴史は PHWS の政策に沿ったものであった。

この7年間の占領期間中に蓄えられた抗生物質医薬品に関する知識と技術は、日本における抗生物質医薬品の創薬の原動力となり、国立予防衛生研究所の梅澤濱夫博士によるフラジオマイシン (1949年)、オーレオスリシン (1949年)、ザルコマイシン (1953年)、カナマイシン (1957年)、ブレオマイシン (1965年) などの発見と実用化、東京大学伝染病研究所の細谷省吾博士によるトリコマイシンの発見 (1952年)、北里研究所の秦藤樹博士によるロイコマイシン (1953年；後にキタサマイシン)、カルチノフィリン (1954年)、マイトマイシン C (1956年) の発見と実用化などの大きな成果が得られている。

一方、我が国の製薬企業における抗生物質医薬品の研究開発の歴史は極めて輝かしいものであり、世界に雄飛しグローバルな標準薬となった医薬品はコリスチン (1950年；ライオン菌薬)、セファゾリン (1969年；藤沢薬品)、アミカシン (1972年；ブリストル万有研究所)、ピペラシリン (1976年；富山化学)、クラリスロマイシン (1984年；大正製薬)、メロペネム (1987年；住友製薬)、ミカファンギン (1998年；藤沢薬品) など列挙に暇がなく、日本は抗生物質医薬品の研究開発において世界の主導的な位置を保ってきた。

我が国で臨床使用されてきた抗生物質医薬品は、既に製造中止になっているものを含めた累積成分数で206成分に達しているが、その主流はβ-ラクタム系であって、セフェム系48成分、ペニシリン系27成分、カルバペネム系などの各種β-ラクタム系12成分を合せて87成分あり、全成分の42%となっている。カナマイシンなどのアミノグリコシド系は15成分 (7%)、エリスロマイシンなどのマクロライド系は27成分 (13%)、ホスホマイシンやクリンダマイシンなどの各種抗生物質が20成分 (10%) であるが、リファンピシンなどの抗結核抗生物質が11成分 (5%)、アムホテリシン B などの抗真菌抗生物質が14成分 (7%)、マイトマイシン C などの抗腫瘍性抗生物質が16成分 (8%) となっている。

同系統の抗生物質医薬品が多種類使用されていることに対する批判があるが、同じセフェム系であっても血中濃度半減期が20分ほどの速効型のものから8時間に及ぶ超持続型のものがあり、投与量の大部分が尿中に排泄されるものと胆汁中に排泄されるものがあり、同じ細菌性肺炎を適応とするものであっても、肺炎球菌に強いものもあればインフルエンザ菌に強いものがある。

我が国には、このような抗生物質医薬品の個々の特徴を上手く使い分ける感染症専門医が多数育っており、諸外国に比べて耐性菌感染症による問題も少なく、感染症の予後が良い状況にあることは喜ばしいことである。

日本薬史学会主催 Greene 講演会報告記

編集委員 小清水敏昌、ヨング・ジュリア

2014年1月16日(木) 18:00から標記の講演会が東大農学部弥生講堂で開催された。演者の Jeremy Greene氏は米国ジョーンズ・ホプキンス大学医学部医史学部門の准教授で、かつハーバード大学出身の医師でもあり特に医薬品プロモーションと医師との関係についての執筆が多くその造詣が深い。本年初めのマニラでの ASEAN医史学会に氏は参加することになっていた。昔から氏と親交のあった津谷喜一郎会長が Greene氏に連絡し、学会終了後に日本に立ち寄った際、わが国での講演を特別に依頼し急遽実現となった次第である。演題は「歴史から見た医薬品のプロモーション活動—製薬企業・医師・薬剤師・消費者」(Pharmaceutical Promotion in Historical Perspective)。

当日は、予算の関係で通訳が無く、早口でエネルギーに語る Greene先生の英語を聞くことにやや疲れを覚えた参加者もいたかも知れない。しかし、米国における過去の製薬企業によるプロモーション活動の具体的な宣伝方法等に関してスライドに示しながらの講演は、とても興味深いものであった。

歴史的に見ると、大戦後の1950年代に米国の産業は大きく成長し、とりわけ製薬産業においては医薬品の種類や製造量が増え、製薬企業間の競争が激しくなっていった。そのため、医師にとって医薬品情報を収集するためには製薬企業の宣伝等が頼りになった。行政による規制や医療環境の変化に伴い、企業が自社製品を販売するための宣伝広告やMRによる宣伝などがその時代とともに変遷していった。こうした宣伝物も提示して説明した。

特に、演者はプロモーション活動と医師との関係を4つに区分して詳しく解説をした。advertising(宣伝活動)、detailing(ディテール活動)、profiling(医師の処方動向などのマーケティング的な情報収集)、education(医師の継続教育)を示し、これらは相互に関係しておりプロモーションも有益な場合と有害で価値のない場合がある。医師も有能な医師



Jeremy Greene 氏



会場風景

と企業から狙われやすい医師とがいる。企業と医師の関係が自分の専門外の場合、興味がない場合、競合した教育の場合、騙されやすい場合などそれぞれで関連があると指摘した。また、臨床雑誌への企業の宣伝広告が増加し1959年のJAMAの場合では広告収入が収益の半分を占めるようになった。その後、米国では法律により製薬企業による公共的広告が出来るようになり、新聞やジャーナルにも医薬品の宣伝を掲載するようになった。

講演の途中に1回と、講演後の質疑応答は活発で、日本語の解説もあり20:00時頃に終了した。講演内容は、本学会国際委員会委員で本報告の筆者である

ジュリア・ヨングにより薬事日報2014年2月3日号に報告され、また講演会后、小清水も含めたGreene氏を囲む座談会が開催され、ミクス誌2014年4月号に掲載予定である。

この講演会には、次の6団体から後援をいただいた。東京大学大学院医学系研究科・医学教育国際研

究センター、東京大学大学院薬学系研究科・医薬政策学講座、日本医史学会、財団法人MR認定センター、日本製薬医学会である。短期間の案内スケジュールであったが、弥生講堂がおおむね埋まるような約180人が参加した。広報などしていただいた後援団体の方々に感謝いたします。

北海道支部だより

日本薬史学会北海道支部報告

日本薬史学会北海道支部常任幹事 関川 彬

昨年度10月5日(土)に開催した日本薬史学会2013年会(札幌)も無事終了し、北海道支部幹事会、準備委員会ともに安堵の気持ちで一杯です。参加された皆様、発表者、活発な討論に加わった皆様に感謝します。なによりも暖かい雰囲気の中で、年会が進行したのも日本薬史学会ならではと思っております。

2014年度の活動は5月24日(土)、25日(日)に開

催される北海道薬学大会(札幌)における支部の総会、特別講演、会員の発表を計画しております。また、秋には北海道医史学研究会と合同の研究発表会を行う予定です。

2014年は支部発足10周年にあたり、月日の経過の速さに驚きを感じます。現在、記念誌の発行等の企画を建てております。

中部支部だより

春の講演会開催について

中部支部長 河村典久

早いもので薬史学会中部支部の設立から1年が経過しました。中部支部の設立後は北陸地区の会員の皆さんも容易に参加できるようにと、講演会などを秋に東海地区と、春に北陸地区において交互に開催するようにと計画しております。薬史学会では、

8月2日に金沢大学(御影雅幸先生)において「柴田フォーラム」が開催される予定ですので、これを春の北陸支部の講演会として開催することといたします。なお、開催についての詳細は、次号の薬史レターに紹介する予定です。

中部支部例会の講演会演題募集

日本薬史学会中部支部例会を下記の要領で開催しますので、発表を希望される方は、演題、発表者等を中部支部事務局にお知らせください。

開催予定：2014年11月

開催予定場所：名城大学名駅サテライト・多目的室
(名古屋市市中村区名駅3-26-8)

研究発表演題申し込み締め切り：2014年7月31日

中部支部事務局

日本薬史学会・中部支部事務局長 飯田耕太郎

名城大学薬学部 薬学教育開発センター

教育開発部門

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL : 052-839-2710 (直通)

E-mail : iida @meijo-u.ac.jp

FAX : 052-834-8090

関西支部だより

合水堂史跡建立計画について

日本薬史学会関西支部 事務局長 宮崎啓一

平成24年9月24日(月)18時から大阪駅前マルビル3F「豆助」梅田マルビル店にて華岡青洲(1760-1835)の実弟 華岡鹿城(1779-1827)が大阪に開設した分院「合水堂」の史跡建立計画に関し、華岡家ご子孫の赤池様姉妹をお招きし懇談会を開催した。

参加した日本薬史学会関西支部のメンバーとしては、村岡 修(支部長)、松本和男(理事)、宮本義夫(評議員)、多胡彰郎(評議員)、宮崎啓一(評議員)の計5名であり、これに加え、本計画の推進者である近畿大学附属看護専門学校の大田伸之氏に参加いただいた。氏は近畿大学医学部図書館勤務を経て華岡青洲に関する資料に通じ、かつ造詣には深いものがある。

今回私ども関西支部のメンバーは、大田氏より協力要請を受け赤池様姉妹を囲み、合水堂を比定し史跡建立にむけたキックオフの会合の場をもった。

世界初の全身麻酔手術を成功したことで名声が広まった華岡青洲には全国から多くの患者や入門希望者が集まり、彼らを迎え入れるため青洲が自邸兼診療所の近くに住居兼病院・医学校を建設したのが「春林軒」(那賀郡西野山村、現和歌山県紀の川市)である。この後、実弟鹿城によって大坂・中之島につくられた分塾が「合水堂」である。

これまで合水堂は、大阪市内を東西に流れる南北の両川堂島川と土佐堀川の間位置する大阪中之島の東端「山崎の鼻」にあったことが知られている(和歌山市立博物館『特別展華岡青洲の医塾 春林軒と合水堂』)。「山崎の鼻」とは、中之島の東端に山崎藩の蔵屋敷があったことより上流からの砂の堆積による砂州が鼻のように伸びたことを受け、呼びならわされるようになったことによる。

この中之島東端は「山崎の鼻」で両川に分れる場所であるが、川上にかかる難波橋からみると、ふた

つの川が合流しているようにみえたことから、「合水堂」と名付けたといわれる。現在、この地に合水堂の痕跡はみあたらないが、付近には大阪市立東洋陶磁美術館や京阪電鉄中之島線なにわ橋駅がある。

一方、本会合で赤池様姉妹も示されるとおり、大阪府立中之島図書館所蔵の『中之島尋常小学校中之島史』の梅檀木橋の近くに合水堂医院があったとの記載が一番新しいものであるといえる。付近には現在大阪市立中央公会堂や大阪府立中之島図書館をみることができる。

このように合水堂は、山崎の鼻付近と比定されるものの、今回梅檀木橋付近も有力な候補のひとつと考えられた。梅檀木橋より上流の砂州の土地周辺は、すべて山崎の鼻と称される地域で、現在の中之島一丁目あたりの地域全体をさす呼称でもある。ちなみにこの地域は地籍が旧陸軍関係施設にあったことから混乱しており、土地の所有関係が不明瞭なのが問題でもある。現大阪市長橋下 徹氏が府知事当時、大阪市を相手取り中之島公会堂などの土地が府の所有か市の所有か係争をいだし、物議をかもしたこともあった。

このいずれを候補としても、当時土佐堀川を隔てた過書町(現在の大阪市中央区北浜三丁目)には緒方洪庵の適塾があり、華岡合水堂の通学生と適塾の塾生とが通りで出会うこともしばしばあったといわれる。

今後、私どもは合水堂史跡建立にむけ、その位置を比定するためのエビデンスを用意し、関係筋に働きかけることを確認した。

最後に関係資料を提示いただいた赤池様姉妹にお礼を申し上げ、第1回の会合を締めくくった。

現在、合水堂に関するその後の知見などに関し、同メンバーで協議にあたる予定である。

最近の科学社会史の著書を読んで

山川浩司

最近の二三の医薬社会の本を読んだ印象で埋め草を綴る。

1. 小長谷正明著：医学探偵の歴史事件簿（岩波新書）
2014年2月刊

神経医学の医師によるこの新書はV部に渡り医学に関わる事件について、随所に関連する画像を示して興味深く述べられている。

第I部の二十世紀世界史の舞台裏には、レーガン米大統領のアルツハイマー病は有名であるが、若い大統領のケネディーは腰痛で副腎皮質ホルモンによる副作用に悩まされていた。また、スターリンと医師団陰謀事件は評者には見新しい事例で興味深かった。第II部の近代日本史の曲がり角で、明治天皇の脚気は良く知られている事であるが、二・二六事件と輸血という余り知られていない事が取り上げられている。第III部は、医学を変える人々としてナイチンゲール、パスツール、キュリー夫人に関わる話題でパスツールの狂犬病の闘いが取り上げられている。評者もパスツール研究所を訪ねた時、所内に狂犬病の犬の像を見た事を思い出した。第IV部では王と医師たち事例が取り上げられている。第V部には、古代の病の推移に倭建命、源頼朝、ハクスブルグ王朝などの話題が取り上げられている。

る。評者にとっては、それぞれ興味深く読んだ。

平成になって四半世紀しかならないが、それでも二三の平成史が出版されている。社会の変化が従来に比べると速いと云うことであろう。

2. 小熊英二 編著、平成史、470頁、河出ブックス（2012年）
3. 中村政則、森武磨 編、年表 昭和・平成史 1926～2011 95頁、岩波ブックレット

最近は年表概説に関する書籍が少ないので、この編著は貴重で役立つ。

かつての名著、湯浅光朝編著「解説科学文化史年表（中央公論社）」のような著書の出版が渴望される。

4. 鈴木 淳 著、「新技術の社会誌」 シリーズ日本の近代、2013年刊（中公文庫）

日本近代シリーズの一冊であるが、明治から大正昭和期を通して乗り物が人力車、電車、自動車と変わり、家庭生活では、洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ、クーラー、プロパンガスなどの登場で、目まぐるしく変容していく。これらの過程と実態が生き生きと記述されている。日本の社会が、この百数十年で激動の変貌をしてきたのかを本書で、改めて再認識させられた。

2013山清 世界の伝統医薬フェア&フェスティバル

日本薬史学会評議員 石田純郎

2013年9月6日から10月20日まで韓国慶尚南道山清郡東医宝鑑村の王山の山裾の広大な会場で、「2013山清（サンチョン）世界の伝統医薬フェア&フェスティバル」が開かれた。

韓国史上最良の医薬書である許浚（ホジュン、1539～1615）著の『東医宝鑑』が1613年に刊行されたが、その400周年を記念し、許浚の出身地とされる山清で、世界の伝統医薬エキスポが開かれた。

恒久展示館である東医宝鑑博物館を中心に、テーマ館、山清薬草館、世界館、薬膳文化館、韓方体験館、韓方気体験場などが置かれ、多数の韓国人、日本人を含む外国人見学者が訪問した。

東医宝鑑博物館では許浚と東医宝鑑の成立について判りやすく説明し、世界館には世界の伝統医薬に関する展示があった。その中には日本の富山の置き薬、ドイツのホメオパシー、ルーマニアの伝統薬草

茶などの展示も含まれる。

『東医宝鑑』とその成立に関する展示は正確なものが多いが、後は韓国の博物館にありがちな厳密な考証なしの展示や、何でも日本に影響を及ぼしたとする誇大妄想的な展示も散見された。東医宝鑑博物館は、恒久展示館であり、エキスポ終了後も一般に開放されているはずである。文禄慶長の役の戦場で有名な慶尚南道西端の雄都 晋州 (チンジュ) から北へ市外バス(頻発)で30分、山清バスターミナルに到着する。そこからタクシーで15分(1000円)で東医宝鑑博物館まで到達できる。

なおこの会場の北7キロの場所に、岡山県赤磐市熊山にある謎の石積み遺跡である熊山遺跡と類似した伝九衡王陵(史跡第214号)もある。



東医宝鑑を手に持つ許浚



東医宝鑑の前に立つ許浚と長今(長今、チャングムは虚構)



製菜風景



東医宝鑑の日本への影響(一部想像を含む)



伝九衡王陵

薬史往来 薬剤師とは何かを解くために

一橋大学大学院社会学研究科 博士課程 赤木佳寿子

指導教授の「歴史をどんなものとして捉えている？」との問いに、「……宇宙」。そんな言葉が自分の口から出たときは、我ながらびっくりした。

歴史とは線でも面でもなく空間でもない。さらに時間軸の加わった4次元、いや、それ以上の多次元空間である。その中の一点に注目してみると多方向からの影響が存在する。その影響と事象としての変化、不変を総じて歴史というのではないだろうか。その宇宙の中から取り出したい事象を線と面で紡ぐことで歴史は語られる。

私が歴史を見ようと考えたのは、「薬剤師とは何か」を解くためであった。なぜ解こうとしたのか。それは、私はこれまで薬剤師として働きかけて何度も道を阻まれてきたことに関係がある。阻んだ原因はほとんどが家族の健康問題だった。これでもか、これでもかと問題が起きた。そのために私は患者の家族として薬剤師の近年の変化をじっくり観察する機会を得た。外に働きに出られない分、学ぶことに力を注ぎ、

薬学とは違う学問も学ぶようになった。そして今、「薬剤師とは何か、何をすべきか」を解き明かさなければならない重要な時期に差し掛かっていることに気づいた。

では、なぜ歴史なのか。現在の状態を作り上げた原因や状況は歴史の中に見出すことができ、その変化が多く示唆を与えてくれるからだ。例えば薬は太古より人々を病の苦しみから解放し、活動や生活の可能性をひろげ、人生をよりよくしてきたが、その意味に変化もみられる。痛みをとること、延命、機能の温存のどれが最重要かなど治療に対する人々の要求や必要性の変化にも対応している。この変化は薬学、薬剤師のあり方についても然りだ。

それゆえ歴史をみることで薬剤師とは何か、これからの薬剤師はどうあるべきなのかを見出せるのではないかと考えたのである。

薬剤師という職業に及ぼす影響、そのなかでも人々や社会の要求と必要性をうまく紡いで形にしていきたい。私の研究の目標はそのようなものである。

薬史レターへの投稿をお待ちしています

薬史に関するエピソードをはじめニュースや図書紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。図書紹介は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号(第71号)は2014年6月発行予定(締め切りは4月末日)です。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第70号 2014年3月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局)

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>